

けあまね ひろば

2020 № 18 3/20

編集発行 特定非営利活動法人
鹿児島県介護支援専門員協議会
【事務局】 鹿児島市魂池2-30-8(県老人福祉会館2F)
電話:099(255)0072 FAX:099(298)1737



シマのゆしごとうに触れ思う

有限会社 わんわんネット
中里 浩然



奄美に伝わる格言(ゆしごとう)に、「水や山うかけ、人(ちゅ)や世間うかけ」と言うものがあります。水が山の森林によって育まれるように、われわれ人間は直接的あるいは間接的に世間の恩恵を受けている。世間、他人様に感謝し地域のために役立つようにしたいものだという意味です。

このような奄美方言(奄美大島、喜界島、徳之島)や国頭方言(沖永良部島、与論島、沖縄本島北部)は、ユネスコが平成21年に発表した〈世界の消滅危機言語〉の中に含まれています。去る2月22日・23日、奄美市において「危機的な状況にある言語・方言サミット」が開催されました。全国各地の将来消滅の危機にあるとされる方言の話者や研究者が一堂に会し、各地の言語・方言の伝承活動について報告があったほか、奄美市の児童による格言(ゆしごとう)の発表などがあり、島の宝とも言えるこれらの方言を、豊かな精神文化の象徴として次世代へ伝承することを誓う大会宣言が採択されました。

奇しくも同日、鹿児島市において第11回日本介護支援専門員協会九州・沖縄ブロック研究大会in鹿児島が「新たな時代へケアマネジメントの進化と深化／真価へ変わる時代・変わらぬ想い～」をテーマに開催されました。日本介護支援専門員協会柴口会長による協会の活動報告に続き、厚生労働省・大島老健局長による、2040年における社会経済の変化や、現下の介護の課題(人手不足・基盤整備、認知症、財政の持続性)と「地域包括ケア・地域づくり」についての基調講演が行われました。また、①地域共生社会の実現 ②多様な住まいと住まい方 ③ICTを活用した地域とのつながりを題材に各分科会もあり、九州内外より多くのケアマネジャーが参加し、大いに盛り上がった大会となりました。私も以前から興味のあったICTを活用した分科会へ参加し、入退院時の連携ソフトを使った事例、MCS(メディカルケアステーション)を利用し職種の垣根を越えたつながりを築いている地域の事例、離島やへき地のケアマネジャーへ向け、ウェブ会議システムZoomを取り入れ法定研修等を実施している事例、それぞれに難題に向き合い取り組み続けてる發

表に大変刺激を受けました。

さて、冒頭のシマのゆしごとうには、人と人との相互扶助だけでなく、人と自然そして人と社会の共生といった意味もあるでしょう。殊に奄美の世界自然遺産へ向けた取り組みという中でも、シマに住む私たちは、自然や動植物などかけがえのない資源を見つめ直し、またそれだけにとどまらず奄美地域独自の伝統文化や人情の細やかさ、人と人との繋がりを大切にしていかなければなりません。

私たち奄美大島・喜界島支部においては、支部会員の多くが携わっている奄美大島介護保険事業所協議会と協働し、子供から高齢者そして障がいなどを抱えた人々が安心して生活できるシマを作っていくと「奄美共生プロジェクト」を立ち上げ、啓蒙イベントを行っています。参加体験型のイベントとして、それぞれのベースでゴールを目指す「街中ウォーキング」があり、参加者は電動車いすや足漕ぎ車いすを利用する人、認知症の人と家族、支援者、初めて車イスに触れた子供たちなど、多種多様なスタイルで生き生きと街中を進む姿はとても印象的です。他にも、障がい者自立支援サービスの就労支援事業所で制作している作品を展示販売するブースなどが立ち並ぶ「共生マルシェ」。そして、共生社会について住民向けの講演会が開催されます。私たちが暮らす奄美においても一部地域の自治会が消滅し住民どうしの関係が希薄化するといった現状を憂い、多くの職能団体や行政職員、地方ラジオ局を巻き込んで開催されるこのイベントは、ケアマネジャーの地域参画の機会と捉えて支部会員とともに今後も力を入れていきたいです。

奄美大島・喜界島支部長として一年が経ち、奮闘する日々ですが、「全員参加型の組織作り」と「発信・提言型の組織づくり」を目指し、シマの結(ゆい)の心に誇りを持ち次世代へと紡ぎ伝える活動を続けていくこうと思っています。マタンキャウガミンショローアリガッサマリヨウタ(またお会いしましょう。ありがとうございました。)